

令和5年度 学校経営方針

新潟市立大形中学校
校長 後野 孝仁

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行から3年が経過した。この間、社会の様々な状況が大きく変化するとともに、学校教育の現場においても大きな変化が見られた3年間であったと言える。

このような状況の変化を困難と捉え、いろいろな取組を諦めることは、ある意味で簡単なことであった。しかし、大形中学校では、このような考え方には立たず、価値ある取組を「いかにしてやるか」に心を砕き、様々な工夫のもとで取組を推進してきた。また、時代が急速に変化する昨今において、学校だけが旧態依然として変わらないことをよしとせず、慣例や前例踏襲からの脱却を図ってきた。

その結果、生徒の様相は学校教育ビジョンに掲げた「目指す生徒像」に確実に迫りつつある。また、学校全体としても「目指す学校像」に向けて一歩ずつ迫ることができつつある。

そこで、令和5年度は、令和4年度の学校経営方針を基本的に継続しながら、その精度を高め、また新たな視点や必要な修正を加えて取り組んでいくこととする。その上で、徹底すべきところは徹底する「強さ」と、状況の変化に合わせて対応する「柔軟さ」の両方を大切にして、全教職員が学校経営に主体的に参画する姿勢をもって取り組んでいく。

1 資質・能力の育成を図る教育の推進

学習指導要領において、将来をたくましく生き抜く生徒に必要な「資質・能力の育成」が明確に打ち出されているとおり、私たちは生徒が「生きる力」を確かに身に付けるよう育成に努めなければならない。そこで、次のことを常に意識しながら、学校経営を行い、教育活動に取り組んでいく。

- 教育活動を行うに当たっては、育成を目指す資質・能力である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の具体を明確にして、取組を進める。
- 取り組む全ての教育活動において、「目指す生徒像」「身に付けさせたい資質・能力」の視点から活動の在り方や内容・方法等を見つめ、その達成に向けてぶれずに取り組んでいく。

教科指導においては、ややもすると「知識・技能」に比重がかかりすぎ、教師主導の授業となっていた実態から脱却し、3観点のバランスをとりながら、生徒の主体性を引き出す授業づくりを行っていく。具体的には「思考力・判断力・表現力」や「主体的に学習に取り組む態度」についての理解を学校全体や各教科部として確実にを行い、その共通理解のもとで指導や評価を適切に行っていくことに力点を置いて取り組んでいく。

また、それとともに、生徒の実態から見えてきたよさや弱さから、特に「自主・自律」「かかわる力」「粘り強さ」「しなやかさ」の育成に力を入れて取り組んでいく。各教育活動のもつ固有のねらいに加え、育成を目指す資質・能力の観点からもねらいを定め、それを達成するための具体的な手立てを講じながら、より確かに資質・能力が身に付くように支援していく。

2 生徒の自主性・主体性を大切にした教育活動の推進

「子どもが真ん中」「まず子どもありき」という教育の原点に立って、「生徒にとってのよさ」で語れる学校経営、教育活動を力強く推進していく。

教育活動を推進するに当たっては、目の前の生徒にしっかりと正対することを基本的な構えとしながら、生徒の自主性・主体性の育成を柱として、次の点を重視して取り組んでいく。

- 授業や学級活動、生徒会活動等において、「自ら課題を見つけ、その解決に向けて自ら取り組む」生徒の姿勢を大切にする。
- 自主的・主体的な活動が生徒の自己決定を受けたものとなるよう、適切に支援する。

私たち教職員が「教える」「指導する」「指示する」「型にはめる」という考え方から脱却し、「生徒に預ける」「生徒にとことん考えさせる」「生徒とともに考える」「生徒の決定を受け入れる」という考え方となって、生徒が自ら育つことを待てる存在となることを目指す。「指導者」から「支援者・伴走者」へと、勇気をもって私たち自身の意識と行動を変えていかなければならない。

生徒が自分や自分たちのなりたい姿である「目指す姿」を意識し、それに迫るために、責任をもって「自己決定」して活動に取り組むことが、真に意味のある「自主性・主体性」を発揮した取組のために必要なことである。そのために私たちは、自分たちが従来もっていた「教職員のあるべき姿」のイメージを時代に合わせて見直しながら、生徒の育成を図っていく。

3 不登校・不登校傾向及び教室不適應への対応と未然防止の推進

不登校・不登校傾向の生徒が多い現状や、人間関係トラブルによって生徒がすぐ欠席したり教室不適應となったりする現状は、大形中学校の大きな学校課題である。一旦そのような状況に陥ると、改善・復帰までに多くの時間と労力を要することから、この問題への対応や改善への取組はもちろんのこと、未然防止に力を入れていくことが肝要である。

- 集団における支持的風土の醸成に力を入れ、生徒一人一人が安心して自分らしさを発揮できるとともに、自分と異なる他者を受容できる個や集団の育成に努める。
- 困難やトラブルに立ち向かう強さや柔軟に受け止めるしなやかさを育むとともに、それらに遭遇したときの耐性であるレジリエンス（回復力、復元力）の強化を図る。

学級担任や学年部等を中心とした粘り強い個別対応に頼り切りになるのではなく、学校全体の体制の強化や取組の充実を図っていく。

4 「地域とともにある学校」づくりの推進

令和2年度末に大形中学校後援会が発足し、昨年度は部活動支援を中心に学校を力強く支援いただいた。また、大形地区コミュニティ協議会や大形地区青少年育成協議会等の地域の組織からは、長年にわたって学校を支えていただいている。加えて、令和4年度からは、これら地域のメンバーを含むコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）がスタートした。

このような体制が地域に整っていることを強みとして、学校と地域が「ともに学校をつくる主体者」であるという考え方のもと、責任を共有しながら「地域とともにある学校」づくりに取り組んでいく。

- 保護者・地域や学校運営協議会の声を大切にし、生徒の育成にかかわるより多くの人の理解と納得のもとで、力強く学校づくりを推進する。
- 地域の力を積極的に活用し、より多くの人がかかわりながら生徒の育成に努めていく。
- 生徒の生き生きとした姿や確かな成長の姿を地域と共有することで、学校の取組をさらに応援してもらえるようにするとともに、地域の活力源となる存在としての学校を目指す。

地域総がかりで生徒の育成に努めるとともに、地域にとっても学校が必要不可欠な存在となり、学校と地域が win-win の関係となることを目指していく。そのために、学校が積極的に地域に開かれた存在となることを意識して、取組を推進していく

5 時代を見据えた学校改革の推進

時代が大きく変わりつつある現在、学校も時代に合わせて変わっていかなければならない。さらに言うならば、将来を生きる子どもを育てるためには、時代の先を見据えて学校が変わっていかなければならない。「変わらない」「変えない」ことが子どもにとってのよさで語れないならば、勇気をもって変えていくことが必要である。慣例や前例踏襲ありきの姿勢であってはならない。

- 「生徒の育成」と「教職員の働き方」の2つの視点から、改革の必要性を考え、判断する。
- 未知なるものへの挑戦を困難と捉えず、期待感をもって取り組む姿勢を大切にする。
- 学校改革が「積み上げ」の連鎖を生まないように留意する。優先順位の低いものや重要な意味を見いだせないもの、また、教職員の本来業務ではないものは、思い切って「切り捨て」ていくことを視野に改革を推進する。

物事を変えていくには、その内容や方法、タイミングやスピードを吟味する必要があるが、いざ「変える」となったときは、躊躇せず取組を進めていく。

6 「働き方改革」を視点に入れた学校運営の推進

生徒に望ましい教育を提供するためには、私たち教職員が心身ともに元気であることが何よりも大切である。「子どもが真ん中」とする考え方や構えは、教職員の心身の健康あつてのことである。そのため、必要な業務にはとことんこだわりながらも、次の点を重視して取り組んでいく。

- 削減・軽減できる業務は、慣例にとらわれずに大胆に減らしていく構えで見直しを図る。
- 特定の教職員に業務が集中することなく、全教職員が応分の業務を分担・協働して行う体制づくりと意識を大切にする。
- 長時間勤務の見られる実態を改善するため、退勤時刻を意識した働き方に努める。

教職員一人一人の体調や家庭を含む状況は様々である。また、経験年数や経験した業務の内容もまた様々である。そのような中で、教職員一人一人が能力を発揮して業務を行うことは当然であるが、高すぎるレベルが基準となることなく、全教職員ができること、社会人として大切にされなければならないことに目を向け、持続可能な勤務の在り方を模索していく。

7 「チーム大形」としての教職員集団の意識の強化

生徒の望ましい成長に向けて、私たちは一枚岩となって教育を推進していかなければならない。そこで、教職員が同僚性・協働性を高め、一人一人が持ち味を発揮するとともに、互いののりしろを重ねたり、隙間を埋めたりしながら、「チーム大形」の意識と一人一人が学校経営の一翼を担っているという自覚をもって、業務遂行に取り組んでいく。

「チーム大形」の一員としての意識として、次の3点を重視する。

- 業務の遂行に当たり、校務分掌の主担当に任せる意識から脱却し、担当を含むチームで検討し、多くの教職員で取り組むことで、学校経営への一人一人の主體的な参画意識を高める。
- 「対話」による情報交換を重視する。生徒のよさを多く語り合い、生徒の抱える課題を共に解決、改善していこうとする雰囲気職員室づくり、教職員同士の関係性の強化を目指す。
- 困難に直面したとき、問題の解決・改善の努力に向けて自分にできることを自ら考え、率先して取り組むことを通して、安心して頼り、頼られる関係性の醸成・強化を目指す。

「チーム大形」の力で学校を創り、生徒を育むことに加え、私たちの職場をより働きがいのあるものにするためにも、「チーム大形」の力を全員の意識と行動で高めていく。